

14. 当院の周術期における口腔機能管理

歯科口腔外科

田中 瞳 北村 里織
谷澤由紀子 谷 泰子
衣川美沙子 中嶋 郁夢
東谷 泰代 高木 雄基
藤原 成祥

口腔ケアの重要性はすでに広く知られている。特にがん医療における口腔ケアの重要性は非常に高いと考えられている。2012年度に周術期口腔機能管理が保険導入された。周術期等口腔機能管理とは、がん治療の治療前から治療中、治療後に至るまで一貫して口腔ケアを行うことで、合併症の予防、軽減に寄与することを目的としている。さらに2014年度の診療報酬改訂ではその適応症例が拡大となった。当院でも当初から周術期等口腔機能管理に取り組み、多職種を巻き込みながら対応症例数を増やしてきた。また、地域完結の観点から、地域医療機関との連携を図り、適応症例を増やす努力をしているが、未だ全症例に対応できているわけではない。

この度は、周術期等口腔機能管理へのこれまでの取り組みを紹介させて頂き、理解頂くとともに、院内の多職種より多くの意見を頂き、改善に取り組みたいと考えている。

15. ハイブリッド手術室での治療が有効であった前頭蓋底部硬膜動静脈瘻の1例

脳神経外科

大前 凌 新光阿以子
高橋 和也 高野 昌平

【はじめに】

硬膜動静脈瘻の多くは血管内治療にて完治が期待できる。ただし、前頭蓋底部硬膜動静脈瘻に対する塞栓には視力障害のリスクが伴うため、直達手術が推奨される。今回、前頭蓋底部硬膜動静脈瘻に対してハイブリッド手術室にて直達手術を施行した1例を経験したので報告する。

【症例】

70代女性。突然の頭痛を主訴に救急搬送。外傷の既往はなかったが、頭部CTにて右急性硬膜下血腫を認めた。脳血管撮影検査にて右前頭蓋底部硬膜動静脈瘻が出血源と診断。後日、ハイブリッド手術室にて開頭による瘻孔結紮術を施行した。シャント部位をtemporary clipで遮断した後の術中血管撮影にて動静脈瘻、静脈瘤の消失を確認した後に凝固切断した。術後、神経学的異常所見の出現はなく、頭痛も軽減し、独歩退院となった。ハイブリッド手術室での直達手術は遮断部位が適正であることを血管撮影にて評価したうえで切離出来、有用であった。

16. 人工股関節全置換術後に臼蓋スクリューが骨盤内に迷入した一例

整形外科

山下 勝成 阪上 彰彦

心臓血管外科

金光 仁志 毛利 亮

【症例】

80代、女性。X-19年に前医で左変形性股関節症に対し左人工股関節全置換術を施行された。X年9月に誘因なく左鼠径部痛が出現し、前医を受診した。単純X線・CT検査で臼蓋スクリューの骨盤内への逸脱を認めたため当科紹介となった。起立などの動作時に左鼠径部痛を認めたが、独歩は可能であった。造影CT検査でスクリュー先端が左外腸骨動脈に接していることが判明した。心臓血管外科にコンサルトし、異物除去術を施行した。

【手術所見】

心臓血管外科医師により左傍腹直筋アプローチで後腹膜腔に進入した。左外腸骨動脈にスクリュー先端が癒着していたため剥離し摘出した。

【考察】

臼蓋スクリューの突出により骨盤内血管や腸管などを損傷するリスクがあるとされるが、スクリューが骨盤内に迷入したという報告は少な

い。今回、放射線科や心臓血管外科の協力を得てスクリーと血管との位置関係を確認し手術計画を立てることで、安全に除去術を行うことができた。

17. 高吸水性樹脂玩具の誤飲後、内視鏡的に除去した乳児の1例

臨床研修部¹⁾ 小児外科²⁾ 消化器内科³⁾

○渡邊 侑奈¹⁾ 鶴野 雄大²⁾

中井優美子²⁾ 岡本 光正²⁾

福澤 宏明²⁾ 三浦 公³⁾

堀 伸一郎³⁾

症例は0歳の女児。2日前から持続する嘔吐・活気不良で当院紹介となり、精査の超音波検査・CT検査にて十二指腸水平脚に30×25mm大の内部均一な球状の無エコー・低信号領域を認めた。また問診にて高吸水性樹脂でできた玩具誤飲の可能性があると判明し、十二指腸内異物による腸閉塞と診断、同日全身麻酔下に内視鏡的に異物を破碎除去した。高吸水性樹脂は水を含むと数十～数百倍に膨張する性質から紙おむつやインテリアなどの生活用品に使用されているほか、小児用玩具としても安価で発売されている。近年、小児の高吸水性樹脂誤飲の症例報告が散見される。高吸水性樹脂は菓子(グミ)に類似したその形態から小児の誤飲の危険性が高く、また誤飲した場合高率で腸閉塞をきたす可能性がある。高吸水性樹脂誤飲の危険性について、幅広く注意喚起を行っていく必要がある。

18. がん薬物療法における曝露対策

～閉鎖式接続器具の導入～

化学療法センター

石原 里美 大里 勇二

島田 健 中村 孝子

平松 靖史

抗がん薬は、抗がん作用がある一方で、細胞毒性を有し、発がん性や催奇形性、生殖毒性、遺伝毒性等を持つ。そのため、がん薬物療法を

受ける患者だけでなく、抗がん薬を調剤する薬剤師、抗がん薬を投与する看護師も抗がん薬の影響を受け健康への悪影響の危険性があると言われている。特に看護師は、看護師の業務拡大により抗がん薬を投与する機会が増え、実践の中で曝露の機会が最も多い職種であり曝露対策に努める事が重要である。曝露対策において推奨されている環境・物品は、生物学的安全キャビネット (BSC)、閉鎖式薬物移送システム (CSTD)、個人防護具 (PPE) である。化学療法センター内で実施した曝露調査の結果と、化学療法センターで現在実施している曝露対策、今後の課題について報告する。

19. 入退院センターより依頼される心臓超音波検査における所見検出率と、周術期管理が必要となった割合の調査

検査技術部 生体検査課¹⁾ 入退院支援課²⁾

丸田 穂¹⁾ 住ノ江功夫¹⁾

松崎 俊樹¹⁾ 箕田 直樹¹⁾

田淵 裕子¹⁾ 大西由希子¹⁾

佐竹 郁哉¹⁾ 岩佐恵梨花¹⁾

左古田悦子¹⁾ 水田 裕一¹⁾

松下 春風¹⁾ 山本 繁秀¹⁾

田中久美子²⁾

〈要旨〉

現在、当課では心臓及び下肢深部静脈超音波検査の予約枠において「入退院センター枠」を設け、手術前のリスク把握がスムーズに行われるための取り組みを行っている。

入退院センターの依頼は年々増加しており、今年度(2021年4月～11月現在)で既に600件を超える依頼が出ている。そこで、今回我々は心臓超音波検査を対象に、検査結果が患者や臨床にとって有益なものとなっているのか、所見の検出率と、結果により周術期管理が必要となったかを後ろ向き調査した。

2021年4月より、入退院センター枠より依頼された心臓超音波検査を対象とし調査した。

軽微な異常所見は全体の89%で認めた。循環